

近世琉球の徒手武芸と「唐手（トーディー）」

－中国拳法の伝播と日本の武芸の受容－

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期課程

嘉手苺 徹

空手は、沖縄から本土へ普及し、1930年ごろから流派が発生した。空手の流派を区別する目安は、もともとは保有型と稽古体系にあった。現在では、競技化が進み、異種の格闘技との交流も盛んになって、技法や稽古体系には大きな変化が見られる。また、愛好家のニーズも様々である。このような状況から、空手がどのような形成過程をたどってきたのかを明らかにしようとするとき、そもそも何をもって空手とするのか、空手史は、何を明らかにすることなのか分りづらくなっている。これは、価値基準（空手の定義）があいまいなまま、空手の起源と文化的な複合・融合（伝播、受容と変容）の問題が論じられていることが要因の一つである。

近世の琉球国は、中国（清）と冊封・朝貢関係（1392）を持つと同時に、薩摩藩島津氏の琉球侵略（1609）によって、日本（幕府・薩摩藩）に従属するという二重の外交関係の下にあった。以降、近代統一国家をめざす明治政府の武力行使をともなった政策によって沖縄県が設置される（1879）など、日本の一地方にはみられない独自の展開を見せた。近世琉球は、「系持」（士族）と「無系」（百姓）の二大身分制（「家譜」の成立）が確立されていたが、王府は中国的習俗と儒教倫理をすべてに浸透させる政策と、士族層に対しては「諸芸の奨励」（『羽地仕置』1667）を図った。進貢貿易だけでなく、学問・教育の分野を担当し、中国の文化・文物の導入に深く関わる久米村人（クニダチュ）は、中国拳法の伝播に関して重要な役割を担っていた。久米村の発生は、「閩人三十六姓の渡来」（1392）に由来するが、それ以前から既に中国人が来琉し、基礎が築かれていたと考えられている。琉球国の崩壊は久米村の解体も意味し、琉球復国運動には多くの久米村の士族（・出身者）が従事していった。この問題は日清戦争（1895）後も続き、近世、近代沖縄の社会・文化状況を知る上で重要な背景となっている。このことから、近世の徒手武芸がどのような形成過程を辿っていったかを考察するには、琉球（・沖縄）、日本、中国（明・清）との関係性がどう影響したかを分析する必要がある。

空手の呼称は、来歴や特性を表したり、目ざす方向性を示す理念として象徴されたりしたが、その時代の社会的な背景や関係者の意図が反映されて変遷してきた。呼称の変遷を深く掘り下げることで、空手の形成過程の諸相を見ていくことができる。近世琉球の徒手武芸を裏づける史料は少なく、『薩遊紀行』（薩摩藩士、1801）、『南島雑話』（名越左源太、1855）、「二山和睦」（摩文仁親方、1867）とイギリスの軍人、外交官によって記された『朝鮮・琉球航海記』（バジル・ホール、1816）、「NOTES ON LOOCHOO」（E. W. Satow、1873）がある。近代に空手の起源として、琉球の徒手武芸を総称する「手（ティー）」の存在が唱えられるが史料にはみえない。また、1850年頃から、琉球の徒手武芸を示す「唐手（トーディー）」が使われている。

「唐手（トーディー）」は、中国拳法の伝播と日本の武芸の受容によって琉球の文化として生み出されるが、自己（沖縄）を積極的に確立するための“沖縄の文化的アイデンティティ”の形成の問題にも関わっていたと考えられる。

この報告では、空手を定義づける重要な観点として、近世琉球の徒手武芸は、①拳を鍛え、突き（打）の激しさを持ち、②型を中核とした伝承形態を備える2つの特徴を持っていたこと、また、琉球士族の武芸は、「武術」「教養」「芸能」の3つの側面の集合として成り立っていたこと、さらに、その展開には、“沖縄の文化的アイデンティティ”の形成がみられたことを明らかにしたい。